

経済と経営 22-1(1991.6)

〈討 論〉

社会主義の可能性と不可能性

鷺田 小彌太

1

まず、「社会主義」は解体した、自己破産宣言をしたという事実確認から始めなければなりません。しかし、何が解体したのでしょうか。

マルクスが基礎を置き、レーニンが定式化した理念が解体しました。経済的搾取（生産手段の私的所有・賃労働と資本関係）の廃止、失業と貧困（市場経済・恐慌）の廃止、政治的支配（国家・暴力装置）の廃止、戦争（侵略・領土拡大・他民族支配）の否定、宗教（イデオロギー）の否定、という理念です。

なるほど、「社会主義」はこれら理念をすでに実質的には放棄していた。「社会主義」は国家社会主義にしかすぎなく、マルクスやレーニンが構想した社会主義とは異質なものである、ということは出来ます。しかし、レーニンはもとより、マルクスにさえ、「社会主義」との原理的同一性を発見することは出来るのです。つまり、わたしたちは、社会主義がかかげた理念を、「社会主義」はもとより社会主義でさえ否定する（せざるをえない）可能性と現実性の前に立たされているという認識をもって、今日の事態に対面する必要性がある、といたいのです。

解体の第二は、資本主義との競争に破れたことです。なるほど、この敗北

は、一時的なものである、「社会主義」の敗北ではあっても、社会主義の敗北ではない、ということも出来ます。たしかに、マルクスは、資本主義の発展・成熟を基礎に社会主義を構想しました。だから、後進社会での「社会主義」の敗北はあったが、先進社会での社会主義は、これからである、ということになります。私もこの意見に基本的に賛成ですが、そうすると、レーニンの社会主義は、所詮「社会主義」にしかなりえなかった、理論的・歴史的錯誤にすぎないということになります。しかし、マルクスの社会主義だとて、無傷のままではおれません。「社会主義」の敗北から出発して、社会主義の敗北にまで届くような、議論を構築しなければならない、というのが私の意見です。

解体の第三は、「ペレストロイカ」です。「ペレストロイカ」は、社会主義世界体制の解体と、資本主義の政治的・経済的・文化的メカニズムへの段階的同調過程を踏んでいる、という基本認識に立つ必要があります。「ペレストロイカ」は、「社会主義」を解体しつつあります。同時に社会主義を解体してもいるのだ、というところにまで認識を進める必要があるのです。

解体の第四は、「ペレストロイカ」における「原則」は、ソ連が国家として生き残るためにはどんなことでもする、ということにあります。端的には、「社会主義」の放棄ばかりでなく、東欧同盟諸国の切り捨てです。東ドイツは、東欧の優等生といわれてきましたが、西ドイツに「身売り」され、国家が死滅してしまいました。さらに確認すべきは、このようにしてまでも、なおソ連が困難を抜け出る道は見いだしにくい、ということです。

では、私は、「ペレストロイカ」に始まる東欧諸国の「改革」を否定的に見るべきだといいたいのでしょうか。違います。「社会主義」を否定し、社会主義の新たな可能性を見いだすための不可避的な過程である、といいたいのです。

2

しかし、「社会主義」の解体は、「社会主義」の内的必然性が生み出した結果であるだけではありません。世界史の中心構造の変化が生み出した一過程でもあるのです。戦後45年を経て、世界は、「米ソ二極構造」から「米日独三極構造」への転換の道を決定的にしました。「社会主義」は世界史の中心構造から脱落しただけではなく、資本主義の周辺部として生きる道しか残されていないような選択をすでにしてしまったのです。

「社会主義」は、資本主義の経済・政治・文化メカニズムを、端的にいえば、自由競争原理を導入しないかぎり、国家破産は免れない、と認識しました。しかし、導入の結果、大量失業と超インフレが国民生活を襲います。国民生活の破壊過程です。とはいえ、国家の過保護と「ノーメンクラトゥーラ」の特権を解消し、民主主義の全面展開（秘密自由投票による権力の選択・大衆消費社会・大衆文化・労働力市場の自由化等）を遂行するためには、避けては通れない過程なのです。

資本主義のメカニズムを導入することに伴う不可避の過程というステップを踏んだとしても、ソ連を初めとする東欧諸国の未来は苛酷なことに変わりはありません。資本主義への移行は困難です。その成功的な移行はとてつもなく困難です。せいぜい、ECをはじめとする資本主義国の安い労働市場、下請け工場、食料基地という地位にとどまる、というのが予想される未来です。ソ連とて、「ペレストロイカ」の進み具合によって決まるところはありますが、せいぜいよくて、中位の生産力を持つ複合国家（資本主義と国家社会主義の混合物）にとどまる可能性が高いと思います。

しかし、未来がどんなに明るくないとはいえ、国家と党だけに無制限の自由があり、しかも現在のようにデッドライン（死線）をのたうち回らざるをえないような事態よりも、国民一人一人にとっての未来ははるかに明るい

見なければなりません。

このように見ますと、「社会主義的」変革の試みは、歴史の回り道、無駄にすぎなかった、といわざるをえないのでしょうか。然りです。

たしかにソ連は、過去 75 年、革命の祖国として、45 年、社会主義世界体制の盟主として、国家的・文化的尊敬を集め、一定の工業化を果たし、強大な軍事国家としてアメリカと世界を二分する力を発揮してきました。しかし、その付けは途方もなく高いと思わなくてはなりません。これまでの正の力と思われてきたものは、ことごとく負の遺産に転化するからです。

ハンガリー、ポーランド、チェコは、少なくとも 40 年遅れたとってよいと思います。とはいえ、これらの国には、政治・経済・民族文化のすべてにわたって、停滞を取り戻す力が残っていると同時に、再生を阻む内部的障害が比較して小さいのです。

当面もっとも悲惨なのは、東ドイツです。国民の圧倒的多数が「統一」を望んだのは事実ですが、「併合」され、当分西ドイツとの格差に苦しまなくてはなりません。同一民族内における、政治経済、思想文化、個人生活の細部に至まで、屈辱と差別を味わうことになります。

私は、「社会主義」諸国の変動を、明らかに、「社会主義」の自己解消による名誉回復過程だとみます。しかし、一時的にしろ、国家ならびに国民にとって、途方もないような恥辱と劣悪化を含む過程であることには違いありません。それが、どれほど不可避な、未来に通じる過程だとしてもです。

3

では、「社会主義」はもとより、社会主義も、理念的かつ現実的に、不毛であり不能である、といたいのでしょうか。違います。

マルクスもいったように、社会主義は資本主義の達成のうえに打ち建てられるべき〈なにもものか〉なのです。「社会主義」の解体が示したのは、このこ

との無慈悲な程までの正しさです。

ここに、二つのイメージがあります。共産主義を、「現実的な運動、現在の状態を止揚する現実的な運動」(『ドイツ・イデオロギー』)、つまり「終りなき過程」とみなすのか、「gemeinsachftlich な生産手段で以て労働し、彼らの個人的労働諸力を自覚的に gesellschaftlich な労働力として支出する自由な人間たちの結社」(『資本論』)、すなわち未来の一社会状態とみなすのか、です。〈なにものか〉を、極端に言えば、資本主義をたえず止揚する過程とみなすのか、資本主義とは異なる社会状態とみなすのか、の二つです。

社会主義を、共産主義の低次段階とみなすのか、プロ独裁とみなすのかはさておいて、私は、それを一つの「経済的社会構成体」と見る見方に、大きな疑問をもっています。さらに言えば、共産主義を一つのトータルな「経済的社会構成体」と見る見方にも疑問を呈したいと思います。端的に言えば、資本主義の後に、資本主義とは異質な「社会経済構成体」を持つ一つの社会建設の試みは、もしそれが共産主義の理念と結びついてのものであるならば、おおいに危険であり、「社会主義」の実験が示した錯誤の繰り返しになる可能性はきわめて大きい、と考える理由があるからです。

私は、「社会主義は、資本主義とは別なあるもの (etwas mehr) である」と定義したく思います。

社会主義と資本主義の区別の指標を、マルクスが定礎した社会主義(共産主義)の理念、市場経済・賃労働—資本・生産手段の私的所有・国家・軍等の暴力装置・宗教の廃止、の端的な〈存否〉に置くことは出来ない、と考えます。指標は、存否の程度、割合の問題だといいたいのです。

かりに、岩田(昌征)モデルを援用して言えば、現実の経済社会は、〈資本主義的市場経済(M)〉と〈集権的計画経済の社会主義(P)〉と〈自主管理的協議経済の社会主義(C)〉の3典型タイプをあわせ持つ複数主義で成り立っている、ということです。問題は、このいずれをも排除しない、総体ウエイトいかにあります。たしかに現在は、PやCの割合を増す方向が否定

視されていますが、それはPやCの存在それ自体の否定が問題なのではなく、社会主義PやCがある限度を超えて資本主義Mを否定する時に起こる問題性である、といえるのです。逆に、資本主義の利潤増殖の盲目的エネルギーは人間生活の隅々まで商品経済化しようとしませんが、この暴走を制御しきれぬ装置を資本主義は内部にもたないため、資本主義の自然成長性（無意識性）が社会主義の必要性（意識性）を要求するということになるのです。（「社会主義・資本主義・複数主義」『経済セミナー』89・11）

4

したがって、社会主義の可能性は、資本主義の否定・切断のうえに成り立つのではない、という確認が重要なのです。否むしろ、資本主義の無意識の存在を前提にして、はじめて社会主義の意識的展開は可能となるのです。ここから、二つの哲学的命題が導きだされます。

一つは、縮小された欲望と消費、過小な「自然」を価値あるものとする人間論、社会論ではなく、拡張された欲望と消費、過剰な「自然」を内部受胎した人間論、社会論のもとで構想される社会主義だけが、未来を代表する、というものです。

端的に言えば、ブルジョア的欲望（唯物論）といわれてきたものを、それがどのようなものであれ、肯定的に評価することが前提になる、ということです。

第二は、合理と計画は、非合理（盲目性）と非計画の基礎のもとで、初めて可能になる、という哲学です。

ここで「基礎」という言い方はたいそう曖昧ですから、あえて、「基礎」ということを、社会主義の基底部分（自然）は資本主義である、という意味で使おうと思います。つまり、社会主義は、資本主義と切断された「別なあるもの」ではなく、資本主義に直接接木された「別なあるもの」である、とい

うことになります。

ですから、社会主義の計画化とは、市場経済を前提としたものに他ならないのです。資本主義は、社会主義の無意識部分であり、自然です。そういう意味で、土台であるといってよいと思います。この無意識の存在を前提したうえで、初めて、コントロールの問題が出てくるのであって、その逆ではないのです。

社会主義者は、資本主義が不断に生み出す欲望（エゴ）の自由を止揚する、ないしは、コントロールすることを好むようです。しかし、肝腎なのは、欲望の自由、とりわけ個人の欲望の自由を前提として、しかも、その存在を否定しないようなやり方でのコントロールだけが、肯定される行き方なのです。エゴの自由を、ブルジョア的特権、腐敗として断じる心性からは、不毛と悲惨しか生まれえない、と考えます。つまり、欲望の自由は、類的欲求、社会的公正さの基礎に置かれなければならないのであって、その逆ではないということなのです。

この点でいえば、マルクス（主義）の資本主義批判思想は、ブルジョア的唯物論の肯定的側面を余りに清算主義的に取り扱ってきた、といわざるをえません。

5

社会主義者は、民主主義を過度に価値論的に語りすぎると思います。率直に言えば、民主主義とは、エゴの自由の上にあるのです。エゴの自由とは、「個人の生命と財産の不可侵」を第一原理とする「基本的人権」によって示されたものです。

民主主義は、文字通りに言えば、多数決です。ここで多数とは、諸個人の集合です。もとより、諸個人は、「実体」ではありません。ですから、社会は、諸個人の集合に還元できるものではありません。それ以上のものです。多数

決とは、社会の実体ではなく、社会をうまく運用してゆくための技術的側面である、といえると思います。

しかも、この技術的側面をうまく機能させるためには、複合的な性格の諸個人の差別的意志を、一票という単一の抽象物に還元することが必要なのです。というのは、民主主義(多数決)で基本的に問題になるのは、真理(truth)いかんではなく、正(right) いかんだからです。真理は多数決ではありません。正(正義・法)は、それがどのような誤謬を含む場合であれ、真理の度合いを捨象した「一票」に基づく多数決によるのがベターであるというのが、歴史経験則からえた結論です。

言うまでもなく、一票の価値は、たとえだれが投じるにせよ、同じです。ですから、どれほど真理を代表しているとしても、それが多数意志を代表しないかぎり、社会を導いてゆく原理にはなりえない、と考えるのが民主主義なのです。

しかし、多数意志が決定するとはいえ、民主主義には限度があります。それは、民主主義がそのうえで可能なエゴの自由を基本的に侵さないことです。「個人の生命と財産の不可侵」に手を付けません。民主主義がこの限度を超すことがあれば、それは、全体主義の別名に転化します。

諸個人の意志を一票に還元するとは、諸個人の意志を切りちじめる行為ではなく、およそその反対なのです。還元不能な諸個人の意志を、あえて同質なものに還元して物事を決定してゆく技術を習得することなしには、デモクラシーの成熟はない、というのが私の考えです。

戦後、ことあるごとに、社会主義世界体制が成立したのだから、戦争一敗戦一内乱一権力奪取という、銃による革命を選択しない、と「社会主義」は語ってきました。この言明は、おおいに破られました。しかし、「冷戦構造」が終わりを告げた今日、社会主義は、一票を単位とした政治的多数に基づく政権交替を手段とする民主主義によって、選択されねばならない当然の理由があるのです。

6

社会主義はマルクス主義の独占物ではありません。このことを承知したうえで、マルクス主義的社会主義思想について、最後にのべたいと思います。

マルクスは、あらゆる支配思想は支配者階級の思想である、といました。この命題は、マルクス主義を例外としませんでした。マルクス主義は、「社会主義」国で、まさに権力者の思想（国家哲学）になったのです。政治支配を廃絶するために登場した思想が、政治支配の道具と化したのです。

もとより、思想に、もともと、反支配・被支配の思想などという絶対安全な指定席があるわけではありません。人類解放を標榜したマルクスの思想とて、例外ではありません。否、むしろ危険なのは、人類解放という「普遍的な価値」を担うと自認する思想が、その価値意識のゆえにこそ、身の毛のよだつような蛮行をやすやすと合理化して恥じない、ということを引き起こすことにあるのです。

私は、マルクスやレーニンの思想を清算主義的に取り扱うことには反対です。しかし、「真の」マルクス、「真の」レーニンということを旗印に、多様な現実を切断してゆくような思考法には賛成しかねます。『資本論』と『帝国主義論』を基礎に据えた社会科学の導きのない思考は、戯言のたぐいであるなどというのは、その人の勝手ですが、私からいわせれば、相変わらずの脳天気だな、というところです。

私がマルクス主義思想でとりわけ強調したいのは、マルクスが批判的に摂取したブルジョア思想、とりわけイギリス唯物論の普遍的価値に証明をあてるべきだということです。そこから流れ出た唯物論や民主主義に徹底的に学ぶという姿勢がなければ、資本主義の成熟のうえに成立する思想たる地位に到達できかねる、というのが私の考えです。

この点でいいますと、ドイツ観念論、とりわけヘーゲルの系譜のうえにマ

ルクス主義を置く行き方には、避けえない限界があるように思われます。ホッブズやスピノザの普遍的価値を再摂取するやり方に、おおいに照明が当てられて然るべきだと考えます。

7

私は、社会主義とは、資本主義とは別なあるものである、といたしました。資本主義の成熟の後にくるあるものである、ともいたしました。

しかし、社会主義は、資本主義とは、時間空間ともに異領域に弧在するあるものではありません。ここで私は、「資本主義の臨界点(the critical point)としての社会主義」という思考を提出したいと思います。経済、政治、思想、文化のすべての領域において、資本主義が制度マヒに落ち込む「危機点」を意識的に調整するシステムとしての社会主義という観念です。実の所、資本主義と社会主義は、明らかに補完的緊張関係にあるのです。この観念を内容あるものとして提出することをお約束して、拙い論考の結びとします。

(90. 12. 18)

小論文は、90年12月8日「フォーラム90。」の第1回大会・全体会議の第1分散会で報告したもののまとめです。